

ほっかいどう

がいはつグラフ

北海道開発局広報誌

Vol.28

2002 季刊



北海道開発グラフ

通巻第二十八号 二〇〇二年(平成十四年)三月

監修 北海道開発局広報室

発行 財団法人北海道開発協会

〒001-0001 札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌ビル
☎011-700-9511 FAX 011-700-9535

開発の日々の
ひとコマ



北海道農業研究センター内

明治から残るサイロ

北海道開発局営繕部では、北海道農業研究センター（旧北海道農業試験場）の施設整備に携わってきました。（本文16ページ）

北海道農業研究センターでは、明治時代に札幌軟石で造られたサイロが今も大事に保存されています。かつて北海道の原風景としてどこでも見られたサイロも、最近はあまり見られなくなり、今は黒や縞模様のラップフィルムで巻かれた牧草が一般的となりました。

早春の羅臼漁港

知床半島の中央部に位置する羅臼漁港。

羅臼にも遅い春がやってきました。漁船は、夜が明けきらないうちから漁にでかけます。

北海道開発局では、水揚げされる水産物の鮮度保持や、特に厳しい冬期間の漁業活動の改善を図るため、屋根がついた全天候型の岸壁整備にとり組んでいます。

特集●地域づくり・まちづくり

事業紹介／サロマ湖漁港アイスブーム

「川」最前線／鷗川河口の干潟を再生

開発事業のあゆみ／農業技術の発展を支えて1世紀
北海道農業研究センター

ピックアップ／北海道の地域開発を学んだJICA研修員が市民と交流
学校教育の場で使える「火山防災教育副読本」づくり

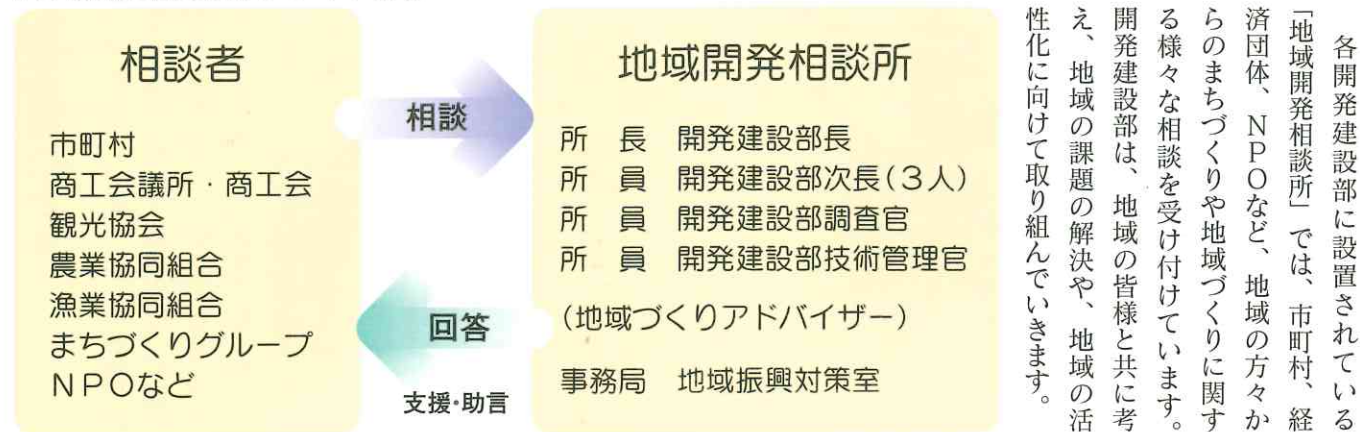
道駅／道の駅弁

北国賦／教える喜びにつつまれて
グライダーインストラクター 堀川 勲さん

地域開発相談所の設置

北海道開発局は、全道の開発建設部に、地域づくりに関する相談窓口を設置しています。

「地域開発相談所」のしくみ(例)



相談内容(例)

- 地域の広域的発展に関する支援・助言………
- まちづくり・地域づくりに関すること
- 地域の抱える課題に関すること
- 河川・道路・港湾・農業基盤等の施設の有効活用に関する事など

実際に相談してみても…

旭川市立緑が丘中学校
木本 貴仁先生



「総合的な学習の時間」では、生徒がテーマを選び、そのテーマについて自分で調べる手段も探します。今回生徒がホームページで「旭建なんでも相談所」を見つけてきたのですが、正直言って、この相談所でこういった相談を受け付けてくれるものなのか、迷いました。でも電話してみたところ、生徒の訪問を快く受けてくれるということでした。

生徒たちは、当日は開発建設部に行くだけでとても緊張したようです。話の内容も、中学校1年生には少し難しい言葉もあったようですが、色々な図やグラフを用いてわかりやすく説明してもらい、とても有意義な時間を過ごせたと語っていました。たくさんの質問を準備したつもりだったけれど、もっと聞きたいことがあった、さらに知りたいことができたと言っています。

私たちが、役所に何か聞きたいとき、「役所のどこに聞けばいいかわからない」というのが最初に問題になります。しかしこういった窓口があると、わかりやすだけでなく、なんでも相談できるというのは、心強いものです。今後も、生徒が何か調べたいというときには、お世話になろうと思います。

地域開発相談所に寄せられた相談事例

地域開発相談所には、「事業の現場を見学したい」、「まちづくりに協力してほしい」など様々な相談が寄せられます。今回は、その中から、旭川市の中学校から旭川開発建設部の「旭建なんでも相談所」に寄せられた相談事例をご紹介します。

平成13年10月、旭川市立緑が丘中学校の木本先生から、「本校の1年生6名が、事業の内容について興味を持っているので、詳しく話を聞かせてほしい」という相談がありました。6名は現在、「総合的な学習の時間」の中で、「環境」について学習しており、校区内で行われている工事で伐採された樹木が、どのように処理されているのか興味を持ったとのことでした。この相談を受け、旭川開発建設部では、旭川土木現業所の協力を得て、担当職員が生徒達に説明する機会を設けることとしました。

当日、6名の生徒が旭川開発建設部を訪問し、職員に対して、「道路工事で切った木は、どのように利用されるのですか」、「切った木の中に無駄になる木はあるのですか」などの質問をしました。職員は、伐採した木は、木の保護材、肥料、燃料、家畜の敷きわらなどとして再利用されていることなどを図やグラフを用いて説明しました。

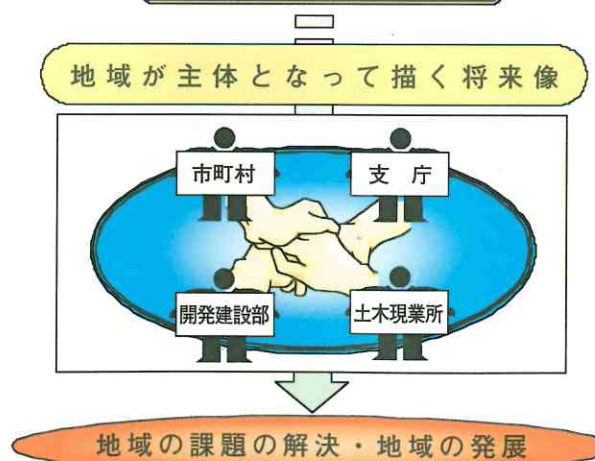
生徒たちは、そのときの話を参考に、学習したことをまとめ、壁新聞を作成しているということです。



地域づくり 特集 まちづくり

北海道開発局では、河川・道路・港湾・空港・農業など、さまざまな事業を行っています。各事業は、それぞれの地域での意見を取り入れながらすすめられています。今回の特集は、地域との連携・協力がテーマです。平成14年1月から2月にかけて、市町村と北海道開発局及び北海道が地域の将来像について話し合う「地域連携会議」が開催されました。この会議の様と、各開発建設部に設けられている「地域開発相談所」での相談窓口の活用例、そして地域とともにまちづくりをしている例として、河川と道路の事業をご紹介します。

地域連携会議



「地域連携会議」が開催されました

北海道の公共事業を取り巻く環境が厳しい中、市町村と各地域の開発建設部(北海道開発局)、支庁及び土木現業所(北海道)が協力・連携して、地域の発展方策等について意見交換を行う「地域連携会議」が道内各支庁(14支庁の所管区域ごと)に設置され、開催されました。

これからは、地域が主体となって自ら描く将来像の実現に向けて、より一層活発な意見交換が行われていくこととなりますが、北海道開発局は、このような取組を重点施策の検討に反映させるなど積極的に支援していきます。

「後志地域連携会議」

支庁所管区域の全市町村が出席する全道最初の地域連携会議である「後志地域連携会議」(構成員:管内20市町村長、小樽開発建設部長、後志支庁長及び小樽土木現業所長)が平成14年1月25日に倶知安町で開催されました。

会議では、「地域全体で議論する場も設けているので、地域内の3つのブロック会議の議論内容が把握でき、より有意義」、「議論するテーマ別に会議を開催することも必要」、「議論する内容はソフト施策を含め幅広くするべき」など、積極的な意見交換が行われました。



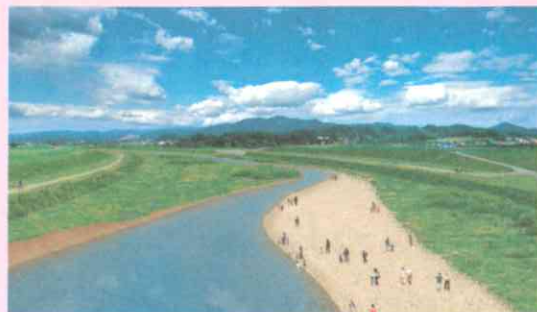
水辺観察ゾーン

現在、創り出された静水面に水鳥が飛来しており、水鳥観察の場として地域住民から親しまれています。そこで、人々が水鳥の飛来や魚類の生息など、地域の貴重な自然との出会いを通して自然への慈愛の年を育む場として利用できるよう、自然観察空間として整備するゾーンです。

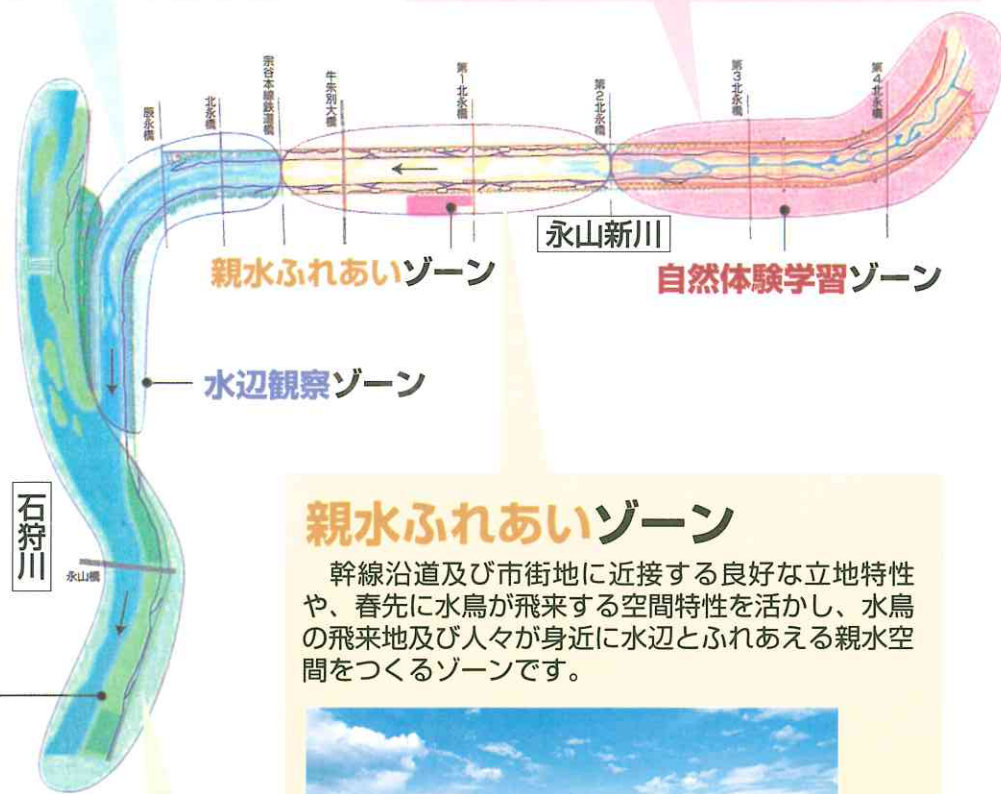


自然体験学習ゾーン

背後の田園的な環境と河道特性を活かし、直に自然とのふれあいができる体験学習の場として利用できるよう整備するゾーンです。



永山新川の水辺づくりは、上流側から、「自然体験学習ゾーン」「親水ふれあいゾーン」「水辺観察ゾーン」「水辺やすらぎゾーン」という4つのエリアに分けて整備をすすめることになりました。



親水ふれあいゾーン

幹線沿道及び市街地に近接する良好な立地特性や、春先に水鳥が飛来する空間特性を活かし、水鳥の飛来地及び人々が身近に水辺とふれあえる親水空間をつくるゾーンです。



水辺やすらぎゾーン

周辺の良い自然環境を活かしながら、人々が自然の中で憩いやすらげるよう、景観のよい河川空間の形成を図るゾーンです。



川に親しめる水辺づくり

牛朱別川と石狩川をつなぐ永山新川。

この川の水辺をどのようなものにするか。現在水辺づくり意見交換会が開かれています。

永山新川とは

牛朱別川は、旭川市内で石狩川に合流する一級河川です。この川は、下流の旭川市街部で川幅が狭くなっており、洪水が起これやすくなっています。そこで、治水効果や経済性、社会的影響などを考慮しながら、牛朱別川の洪水対策を検討した結果、洪水が旭川市街地へ流入する前に、石狩川へ合流させる分水路を建設することとしました。この石狩川へ付け替える水路が永山新川です。

この事業は、昭和59年度に始まり、平成15年度に完成する予定です。完成後は、洪水が市街地へ流入する前に石狩川へ合流させることになるので、洪水に対する安全度は、飛躍的に向上します。



水辺づくり

永山新川の川づくりは、住民の方々が親しみをもてるよう「永山新川水辺づくり意見交換会」を開催し、川づくりについて話

永山新川水辺づくり意見交換会

- | | | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・北方鳥類研究所 ・日本野鳥の会 ・郷土史・永山を考える女性の会 ・旭川市土木部水みどり公園課 ・旭東石油株式会社 ・郷土史・永山を考える女性の会 ・旭川市立永山東小学校 | <p>代表 旭川支部長 石川 信夫</p> <p>会員 課長 伊藤 美一</p> <p>代表 会長 加藤 雅規</p> <p>会長 斉藤 和</p> <p>教諭 澤田 安男</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・旭川市立永山小学校 ・旭川燐化植物研究会 ・J A 旭川市農業共同組合 ・永山グリーンセンター ・旭川大学経済学部 ・児童クラブホロホロ ・旭川開発建設部旭川河川事務所 | <p>教諭 代表 山海 政明</p> <p>センター長 庄司 英雄</p> <p>助教授 出羽 寛</p> <p>代表 谷地 元雄</p> <p>所長 小松 正明</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|



今までに出された主な意見

- ・身障者の利用にも配慮した水辺づくりを行う必要がある。
- ・水辺づくりには、昔の子供が遊んだような視点も必要。
- ・子供達だけで遊びに来るようになるのであれば、安全性に配慮しなければならない。
- ・水止め工の構造は、安全面や魚の遡上に配慮しなければならない。

し合っていたこととしました。この意見交換会は、永山地域の代表の方、小学校の先生、鳥類・植物の専門家等で組織されています。これまでに6回の意見交換会が開催されており、そこで話し合われた意見をもとに、現在整備をすすめています。

私は、永山地域に住んで30年になります。永山新川には、事業が始まったときから注目していたので、意見交換会へ参加することにしました。この交換会には、鳥や植物の専門家、学校の先生などいろいろな分野の方が参加されています。とても活発に意見が飛び交っていて、私自身も、勉強になるなど感じる事がしばしばです。

永山新川には、多くの野鳥が飛来するため、春先にはたくさんの方が訪れます。ですから、この野鳥の生息に適した環境を守っていきたくと思います。また、子どもも大人も、みんなが川に親しめるような空間にしていきたいと考えています。特に今の子どもは、あまり外に出ないようなので、昔私たちがしていたような、川遊びの楽しさを教えてあげたいですね。

今も北海道開発局と地域とで、有意義な意見交換をしています。新川の完成後も、何らかの形で、川についての意見を話し合うことができる機会をもつていきたいと考えています。野鳥観察や川遊びに、たくさんの方に永山に来てもらい、地域だけでなく、訪れた人の意見も取り入れて、さらによい川づくりができると思います。



永山新川水辺づくり
意見交換会 会長
旭東石油株式会社 代表
加藤 雅規さん

自分たちで行うまちづくり

TMOという言葉聞いたことがありますか？
これは、まちづくりの企画・立案を行う機関で、行政、住民が一体となったものです。
大樹町での中心市街地活性化の取組をご紹介します。

TMOで新たなまちづくり

大樹町では、現在中心市街地活性化への取組を行っています。これは、国道236号沿道を含めた大樹町中心部で、民間商業施設や商工会館、物産センターなど、商業の活性化事業にあわせ、国道の沿道空間や、都市内道路及び河川整備などを一体的に行うものです。

この計画は、21世紀の生活スタイルをテーマに、バリアフリーの空間整備と、サービス機能を複合した生活拠点づくりをすることを基本方針としています。

この中心市街地活性化をすすめるのが、TMO（タウンマネジメント機関）です。これは、いわば「まちづくりのプロデューサー」です。大樹町商工会が中心となって、住民の代表となり、まちづくりに、住民が積極的に参加できるシステムを作り、運営しています。

大樹町まちづくりの考え方

大樹町は・・・

- ・清流を活かしたまち
- ・自然にやさしく、自然と共生するまちづくりを目指します。
- ・周辺町村と交流・連携を目指します。
- ・小さくても美しく住ウンをめざします。
- ・心の通う中心市街地ルを先取りした「マ

づくりをすすめます。然と共生するまちづくりを目指します。携し、「小さいけれど魅力的に輝くまち」

みよいまち=ビューティフルスモールタウンの再編=高齢社会、未来型の生活スタイル「ザーステーション」構想を実現します。

開発局では・・・

大樹町の今後の整備内容は、商工会館や物産センター、沿道整備ゾーンのアクセス道路、シンボル交差点、駐車帯等の整備や歩道のバリアフリー化、河川環境整備等を行います。例えば、車と歩行者が共存できる道路整備を行うことで、子供や高齢者、障害者など、誰もが安心して歩ける環境を作ります。また、道路を「通る」だけでなく、「憩い、集う」空間とするため、中心市街の交差点部に、ポケットパーク等を整備します。

北海道開発局では現在、歩道（国道）のバリアフリー化をすすめています。3月末現在で、片側350mが完成しており、今後も反対側を含め、整備を継続していきます。また、南拠点の商工会館・物流センターの建設やアクセス道路の拡幅、歴舟川の環境整備など、多くの分野で補助金の交付を通じ、支援を行っています。今後も、地域の自主的な構想実現に向けた取組に対し、より効果的な支援になるよう、大樹町の方々と話し合いながら、事業を進めていきます。

TMOとは・・・?

Town Management Organization

まちづくりを企画・立案・マネージ（運営・管理）する機関です。
まず住民の生活を第一とした街のありかたを考え、実行していくための「まちづくりのプロデューサー」で、活性化事業の具体策を実施するため、各市町村が認定します。

「まちづくりワークショップ」が開かれています。

中心市街地活性化をすすめるにあたって、大樹町では、「まちづくりワークショップ」を開催しています。ワークショップとは、意見交換会を行う研究会のことで、大樹町では、まちづくりに関心のある人なら誰でも参加できるものとしています。平成8年から11年にかけて、まちづくりの計画作成について、平成12年からは、個別の事業ごとにワークショップが開催されています。現在は、歩きやすい道路づくりや、公園づくりなどについてのワークショップが開催されており、それぞれについて関心のある人が集まって、よりよいまちづくりについて、話し合いが行われています。



ワークショップの様子



大樹町中心市街地活性化基本計画（素案）

1 川北拠点
ホテル複合施設や、道の駅の機能を果たす駐車場整備など、水辺プラザと連動した魅力ある交流拠点を作ります。

2 水辺プラザ
大樹のシンボルとしての歴舟川を大切にしながら再生します。自然の原風景を再現しながら人々が川に集まって来るような工夫をして水辺プラザを整備します。

3 街なか居住整備ゾーン
保健、医療、福祉などの施設やサービスが充実し、マザーズステーションや商店街に歩いて行けるこのゾーンは、民間の事業も導入して街なか居住を推進します。道路網の整備をすすめ、子供からお年寄りまで安心して暮らすことのできるゾーンが実現します。

4 沿道整備ゾーン
外来者にも分かりやすいシンボル交差点の整備をはじめ、国道でありながら人にやさしい工夫がたくさん盛り込まれます。空き店舗の利活用、ポケットパークや駐車場の整備をしながら、美しく生まれ変わります。

5 マザーズステーション
このプランの中核をなす構想です。中央部に車のストレスから解放されたバリアフリーの空間があります。街区の周辺部に駐車場を配置してアクセスを容易にし、いろいろなサービス施設や飲食店が集まる暮らしの拠点となります。

6 南拠点
ショッピングセンターを核施設とし、商工会館や物産センター、バス待合所などの機能を持った施設を併設します。現在北海道開発局では、ショッピングセンター前の歩道のバリアフリー化をすすめています。



ショッピングモールは3月1日オープン



バリアフリー化により、歩道と車道の段差が緩やかになりました。また、点字ブロックを設置することで、視覚障害者に歩道と車道の境目が分かりやすくなりました。

道の駅

美味しいと評判の「道の駅弁」。もう食べましたか？

現在、道内の「道の駅」には、道の駅連絡会が認定した全部で5つの「道の駅弁」があります。いずれも厳選した食材に一工夫こらし、地域を代表する味覚に育ちつつあるようです。さあ、できたてホカホカの道の駅弁はいかがですか。

しらぬか恋問

【国道38号 白糠町】

道の駅弁第1号「炭焼き豚丼」の味とボリュームに大満足！



ヤナギダコの卵（まんま）を使用したオリジナル珍味が人気

2人分のボリュームはある「炭焼き豚丼」。この春、釧路空港売店でミニ炭焼き豚丼を発売予定（写真右上）

道央と道東を結ぶ大動脈・国道38号沿いで、観光スポットのような賑わいをみせているのが「しらぬか恋問」。ここで評判の道の駅弁といえば、館内のレストラン「む〜んらいと」でテイクアウトできる「炭焼き豚丼」です。魚沼産コシヒカリのご飯の上に、つやつやと照り光りした豚肉が6枚も乗って、肉好きにはたまらないボリューム。「沖縄の黒砂糖と岐阜の溜まり醤油を使った秘伝のタレが特徴。豚肉の香ばしさと柔らかさは炭火で焼いているからこそ」と店長の今田さん。「リピーターが多い」というもうなすける美味しさです。この豚丼はレストランの人気メニューでもあります。イクラ、ウニ、タコなど海の幸満載の「恋丼」もオススメ。ほかにも期間限定のオリジナルメニューが色々あり、何度でも足を運びたい本格的レストランです。また店内には、前浜で捕れた鮮魚類が並ぶ地元白糠漁協の直売店があり、大きな魚はその場でおろしてくれたり、調理法も教えてくれるのでとても便利。白糠名産のヤナギダコの卵を使用した「まんまの塩辛」や「まんまの三杯酢」は他では食べられない珍味。お土産コーナーも、シソを原料にした名物焼酎や地元白糠の和菓子など多彩な品ぞろえで充実しています。



生け簀にはモガニやタラバガニが、茹でてくれる



その日、刺し網漁で獲れた活き魚がズラリ

☎01547-5-3317



太平洋沿いにある道の駅。夕日に染まる砂浜が美しい

さらに詳しい情報は、北海道開発局のホームページでもご覧いただけます。
<http://www.hkd.mlit.go.jp>

あさひかわ

【国道237号 旭川市】

上川管内の特産品が一堂ここに。必食！道の駅弁第2号「ソースメンチカツ重」



大展示施設があるのも特徴。週末には自動車ショーなど何かのイベントを必ず開催



上川管内の地場産品をここでじっくり外国樹種見本林にある「三浦綾子記念文学館」は道の駅から車で約3分

JR旭川駅の南側に位置し、向かいが「大雪アリーナ」、博物館が併設された「大雪クリスタルホール」や「三浦綾子文学館」も近接している道の駅です。「旭川地場産業振興センター」がこの駅のメイン施設で、店内には旭川ラーメンから木工製品にいたるまで、上川管内24市町村の特産品を一堂に常設展示販売しており、豊富な品揃えは見るだけでも楽しめます。併設のレストラン「ビジョン館」の目玉は「道の駅弁」第2号に認定された「ソースメンチカツ重」。180gのメンチカツに甘い特製ソースがかかり、ご飯とカツの間にしきつめられた千切りキャベツとの相性も抜群！1日限定20食でテイクアウトできます。また、旭川でしか食べられない「ジュンドック」もオススメです。特製ソースをからめたエビフライ等をご飯で巻いたものですが、具の旨味をご飯が逃がさず包み込み、おにぎりとは一風違う食感が受けています。販売コーナーでは上富良野や大雪など、各地の地ビールが購入できるのもうれしい。旭川生ラーメン詰め合わせや、地元のお菓子も人気だそうです。特に、東京築地に卸している浜頓別の天然ホタテは、地元以外では北海道で買えるのはここだけ。天然ものの極上品をぜひ味わってみてください。

☎0166-61-2283



道の駅弁「ソースメンチカツ重」はお父さん、子供たちは「ジュンドック」と、どちらも食べたい！



名物の旭川ラーメンやお菓子、地酒、工芸品などが広いフロアに並ぶ



鵡川河口の干潟を再生

室蘭開発建設部 鵡川河川事業所
河川係長 梅木 幸治



鵡川の名前の由来はいろいろな説がありますが、ムカ・ベツまたはムッカ・ベであり、「ふさがる川」という意味だといわれています。流域に住む人々からは「母なる川」として親しまれ、「女川」（ボン・ムカ）とも呼ばれていました。

現在の河口の様子と将来のイメージパースです。右の写真中央の四角い部分が人工干潟の試験ヤードです。



私が勤めている鵡川河川事業所では、鵡川と沙流川の治水事業を担当しています。鵡川と沙流川は道内でも屈指の清浄な川で、シシャモ、サケ・マスなどの水産資源が豊富で、下流には良好なシシャモの産卵場所が広がるなど、貴重な自然環境を有しています。私が担当している工事の中で、鵡川河口環境の保全と再生に向けた各種取組があります。鵡川の河口にはシギやチドリを始めとした渡り鳥の休息や餌場となっている干潟があります。しかし、現在は干潟のほとんどが海岸浸食により消失状態となっており、河口左岸の川岸沿いにその一部が残されているのみの状態となっています。このため、これらの保全や干潟機能の再生を目的に、昨年度から海岸浸食の対策工事や人工干潟の試験ヤード造成工事を行っています。

これは、平成12年に地元鵡川町の方々を中心とした河口の保全の在り方を考える「鵡川河口に関する懇談会」の提言を受け地域の方々とともに進めている事業です。現在は、この懇談会の提案・意見を具体的に実施する組織として、「わくわくワーク・むかわ」が発足し、植樹イベントや勉強会などを実施し、河口の保全に関する活動を行っています（私もイベントの一員として参加させてもらいました）。地元関係者の皆さんの意見とも共通しますが、干潟環境の改善を焦って進めようとする予期せぬギャップなどが生じ、かえって取り返しのつかなくなるような結果を招くことも考えられます。このため、具体的に工事を進めるにあたっては、専門家や地元の方々から十分に意見をいただき、またモニタリング調査の結果を踏まえながら、焦らずじっくり試行錯誤を繰り返して、長い目で見て河口の干潟環境が良い方向へ向かうよう努力したいと考えています。



昨年10月に行われた「わくわくワーク・むかわ」の「むかわ河口の森づくり」と題した植樹の様子です。周辺地域に自生しているいろいろな植物の苗や種を植えると河口環境に適したものが生育していきます。

第20回ウインターバルーンフェスティバル

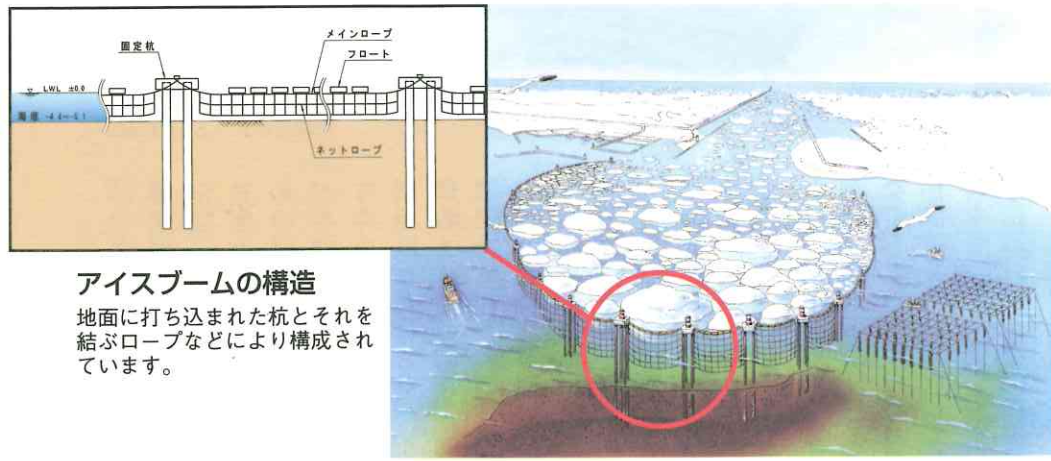
十勝平野の北部に位置する上士幌町では、毎年夏に、「北海道バルーンフェスティバル」、冬には「ウインターバルーンフェスティバル」が開催されています。今年は2月9日～11日に、「第20回ウインターバルーンフェスティバル」が開催されました。

青く澄んだ空と、広がる大地。バルーンストと呼ばれる、気球を楽しむ人々たちにとって、上士幌町は、あこがれの地となっています。





アイスブームが建設される前の状況
流水がオホーツク海からサロマ湖内に流入しています。



アイスブームの構造
地面に打ち込まれた杭とそれを結ぶロープなどにより構成されています。



サロマ湖漁港の全景（夏期）
アイスブームとその保管施設等の関連施設の状況です。流水が接岸する時期ではないため、アイスブームは設置されていません。

ロープは、押し寄せた流水が沿岸から去ると、漁船を航行させるため撤去します。撤去後は、陸上に引き上げ点検整備が必要です。このため、ロープの引き揚げ施設や、保管施設の建設をアイスブームと並行して行ってきました。工事は平成6年度に着手して平成13年度にアイスブームとその関連施設が完成しました。アイスブームの完成により、安全な漁業活動が可能となり、流水による養殖施設被害も解消されました。

事業紹介

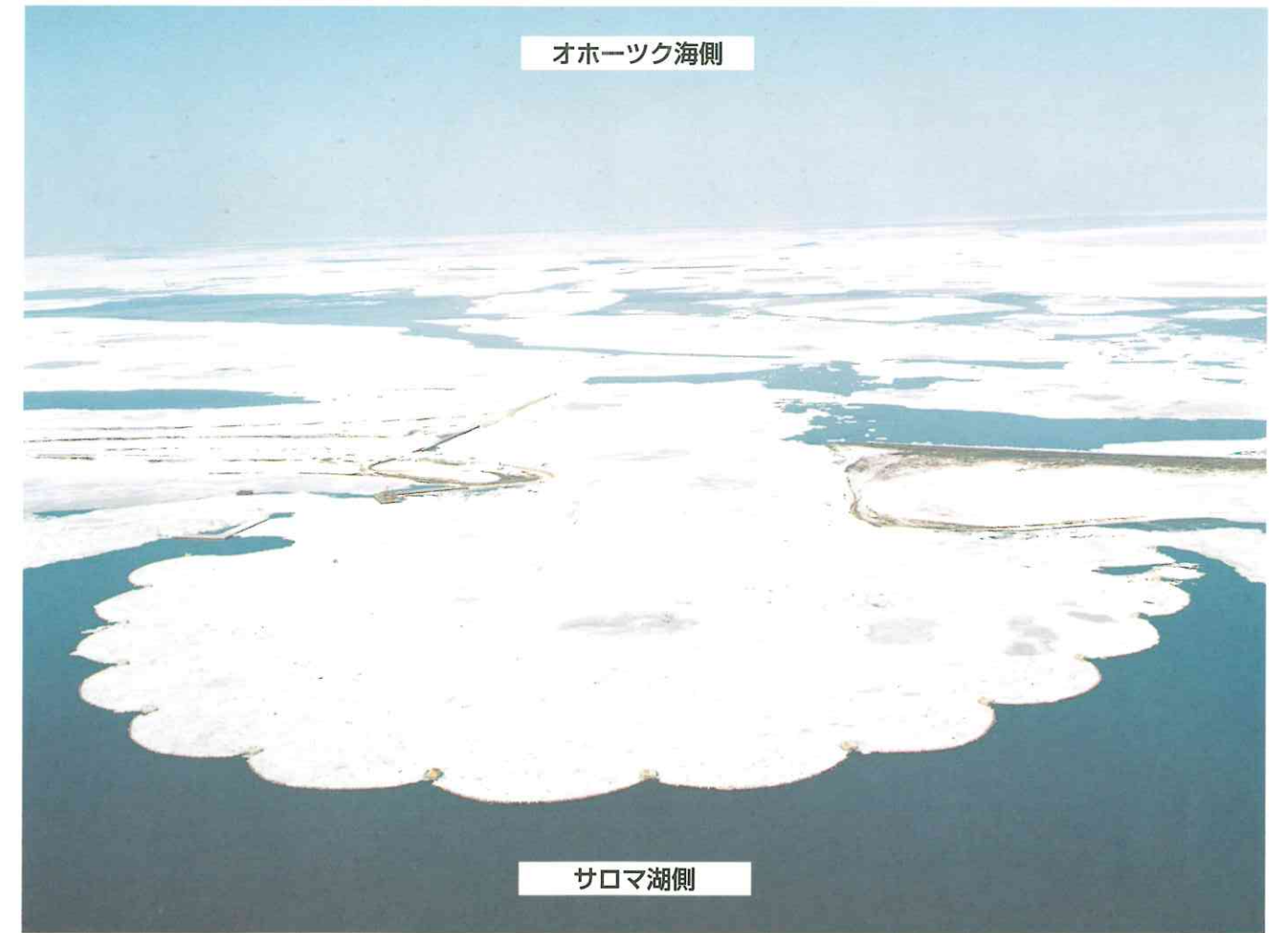


サロマ湖漁港 アイスブーム

一流氷流入対策による漁業被害の防止

サロマ湖では、ホタテ・カキの養殖漁業等が盛んで、年間27億円の漁獲高がある漁業資源豊かな湖です。しかし、冬期間に湖口から流水が流入するため、漁船が安全航行できないなどの被害が生じていました。また、養殖施設が壊され、昭和49年には23億円もの被害がありました。漁民にとって流水対策は長年の懸案事項でした。そこで、これらを解消するため、アイスブーム建設が計画されました。

アイスブームは、①波浪や水の力に対して安全な構造であること、②湖内外の海水交流を妨げないこと、③船舶の出入りを防げないことなどの条件を満たす必要があります。学識経験者などから構成された委員会で検討を行い、海面に浮かべたロープを14本の固定杭に連結させ、流水を制御するという構造（図参照）としました。



アイスブームが建設された後の状況
アイスブームが、流水がサロマ湖内に流入するのを防いでいます。

サロマ湖はオホーツク海に面し、湧別町・佐呂間町及び常呂町の三町にまたがる湖です。オホーツク海とは約20kmの砂州で隔てられていますが、二つの湖口でつながっています。冬になると、オホーツク海には、流水が押し寄せます。流水は、魚介類などの餌となるプランクトンを育み資源豊かな海にしている反面、様々な漁業被害を発生させています。サロマ湖漁港では、流水被害を防止する流水流入対策（アイスブーム）の整備を行っており、このたび完了しましたので、ご紹介します。

教える喜びにつつまれて

〈思い出3題〉

グライダーインストラクター
堀川 勲



昨年とよころ飛行場で夢を実現した彼女とその母親

今から約60年前、九州大分県の久住高原滑空場での事だ。九州大学の佐藤助教授（当時）がグライダーの設計を手がけ、また先生の知人でグライダー好きの当時大工さんの前田さんが製作、そして毎日新聞社のパイロット志鶴氏が完成機のテスト飛行から滞空記録飛行までを行った。こうして九州地区におけるグライダーの本格的な活動が始まり、この3人は日本のグライダー界の発展に大きな影響を与えたこととなった。彼らは私にとって、グライダー界に足を踏み入れた頃からの大先輩であり、親しくして頂いた方々でもある。

彼らの功績を称えるため、久住高原に3人の記念碑が完成。その除幕式が平成12年4月24日に行われ、私も招待頂いた時の話である。

記念式典が終わる頃、私が久住に来る事を事前に伝えていたグループがあり、その内の1人が車で迎えに来てくれた。「帰る前には是非ともお会いしたい」と、福岡市内の名のある料理店に案内してくれ、私も含めて5人で昔話に花を咲かせた。話を聞く内に「ああ、あの時の人達だったのか」と、名前と顔は一致しないものの、その時の状況が鮮明に蘇った。遡ってみると約32〜33年前、彼らが合宿練習中に破損してしまったグライダーの修理を依頼され、訪ねた事があったのを思い浮かべることができたのだ。

平成13年8月26日、九州福岡から1人の中年の女性が、その母親と一緒に久しぶりにとよころ飛行場に来てくれた。数年前彼女が「近いうちに母と一緒に北海道の空をグライダーで飛んでみたい」と言っていたのだ。早速フライトの準備をし、2回程私と一緒に慣熟飛行を行った後、3回目に母親を後ろの席に乗せた待望の親子飛行が実現した。彼女の喜びはひとしおで、私も彼女の夢を叶えてあげられて良かったな、と嬉しい思いがした。

彼女との最初の出会いは約18年前、群馬県板倉町にある滑空場で毎年夏行われていたグライダーの講習会でのこと。私はレギュラー教官として参加し、彼女は教官の資格を取得する望みを持ってこの講習会に参加していた。いよいよ講習が



久住高原の記念碑の前で。右から2番目が私



Profile 堀川 勲 Isao Horikawa

1917年東京生まれ。東京高等専門学校（現芝浦工大）グライダー部で活躍。卒業後、藩州航空勤務を経て、仲間と山口県にグライダー製造会社を設立。グライダー設計、生産、試験飛行に平行して滑空指導に携わり、戦後日本のグライダー界の基礎を創る。教官が同乗できる初の複座機の設計者としても高名。90年にスカイスポーツ国際賞であるポール・ティサンディエ賞（元国際航空連盟事務総長の功績を記念）を受賞。96年に獲得高度五千mを達成したことで、自由距離五百km以上、目的地飛行三百km以上と合わせ、国際航空連盟の最高権威である3つのダイヤモンド勲章を全て受賞。88年から十勝管内豊頃町在住。後輩の指導にあたり自らの記録への挑戦が続く。

2001年秋 とよころ飛行場にて

開始された日、同僚のN教官が私に「彼女を受け持たせてくれ」と言うので、承諾したところ、その日の午後、滑空場に置いてあるピストカールの後ろで泣いている彼女を見つけた。「どうしたのかね」と聞いてみると「教官に怒られてばかりで自信が無い」と言われたので、その後講習が終わるまで私が教官を引き受け、講習終了時に航空局の試験官の試験を受けさせた。この受験科目は、自家用操縦士（単独で自由に飛べる）と操縦教官（教官として初心者の教育ができる）の2種目がある。彼女は既に自家用の資格を持っていたので、この時の操縦教官の資格取得は嬉しそうだった。合格した時の彼女の笑顔が忘れ難い。

昭和15年冬、その頃は山口県防府市内に移り住み、防府市を一望する大平山（630m）において、冬の季節風に依って発生する斜面上昇気流を利用した山岳滑翔によるグライダーの滞在記録を樹立すべく、チャンスを狙っていた。そしてついにその年の12月8日、折しも太平洋戦争開始の1年前のこの日、滞空記録8時間30分と、その内2時間30分の夜間飛行の日本記録を樹立。24歳であった。

その思い出深い防府市内に、昔私の教育を受けて教官資格を取得した、今は亡きS君が設立したグライダークラブがある。活発に活躍していると聞いていたので3年前の夏に思い切って友人N氏の車に同乗して防府市に向かった。豊頃から2日がかりの旅となったが、到着してみれば会員たちの大歓迎を受けてしまったのだ。

そしてその夜、旅館の会食の部屋へ入ってみると、壁には「堀川勲氏を囲む会」と大きく書かれた紙が貼ってあり、ビックリ。この席で酒も回り四方山の話も尽きず、ひと先ず閉会となった後、貼られた紙への寄せ書きが始まり、余す所の無い程に好き勝手な事が書かれたのだった。

その中の一部を書いてみると、「もう一度豊頃へ行きます。後席へ乗って下さい」「空飛ぶ自由人堀川さんいっまでも」「また教えて下さい」「豊頃へ行くぞ堀川先生に会いに」「来年はソロに出るよう頑張ります」「もう一度H-23-C（私の設計機）で飛んでみたい」。

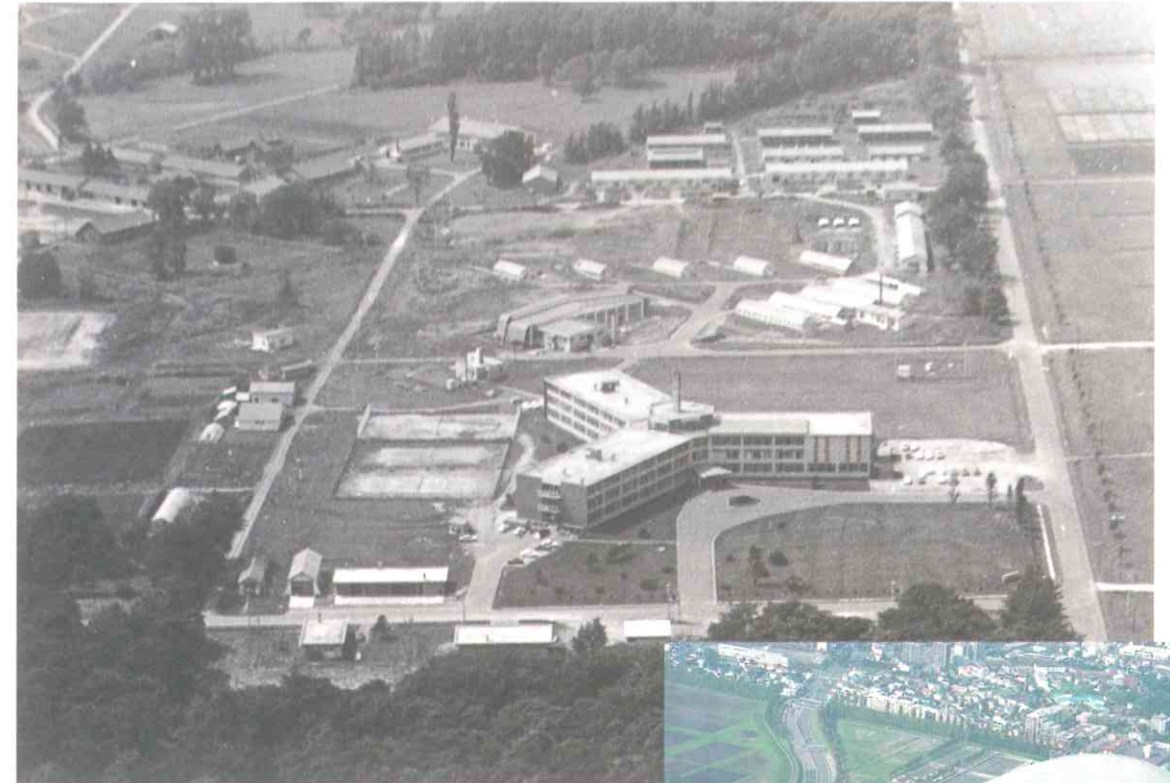


防府のグライダークラブのメンバーの歓迎を受けて

農業技術の発展を支えて1世紀

～北海道農業研究センター～

平成14年6月に開催される、サッカーワールドカップ。北海道でも、札幌ドームで3試合が行われます。この札幌ドームの場所は、北海道農業研究センター（旧北海道農業試験場）の一部だったということをご存じですか？平成9年に、てんさい研究部門が芽室町に移転するまで、ここには、圃場や研究施設があったのです。



昭和41年に羊ヶ丘に移転した当時の北海道農業試験場庁舎。



平成13年に完成した札幌ドームは、農業試験場内の施設が芽室に移転した跡に建設されました。（札幌市提供）

北海道開発局営繕部では、合同庁舎、裁判所など、国の官庁施設の整備を行っています。今回は、北海道の開拓以来、厳しい北海道の気候風土に適応した農業・畜産の研究で、「北農試さん」として広く道民に親しまれ、現在も21世紀北海道農業の先導的研究を続けている「北海道農業研究センター（旧北海道農業試験場）」の施設整備についてご紹介します。

その歴史と研究

北海道農業試験場は、明治34年北海道農事試験場として札幌市北18条西11丁目（当時札幌農学校付属第2農場の一部）に開設され、大正14年に札幌郡琴似村琴似（現在の札幌市西区八軒西）に、その後、昭和41年に月寒種畜牧場のあった豊平区羊ヶ丘へ移転しました。この間、名称も昭和17年に北海道農業試験場、戦後の昭和25年に農林省北海道農業試験場、平成13年に現在の独立行政法人農業技術研究機構「北海道農業研究センター」に改称されました。

開設された当時の北海道は、民間の開拓移住が本格化した時期でしたが、開道以来まだ日も浅く、本州など温暖地での農業技術も、積雪寒冷の厳しい気候風土では通用せず、北海道に適した農業技術のすべては、試験研究をまたねばならない時期でした。泥炭や火山灰、重粘土などの特殊土壌との戦い、寒冷地に適し経営規模にあった農作物の選定、品種改良、栽培技術の開発など、北海道開拓に大きな希望をいだいて移住した入植者が、一日も早く自活できるよう、農業経営基盤の確立のための研究、指導に

この写真は昭和30年の中頃の琴似村（現在の西区八軒西）です。JR函館本線や改修前の発寒川、現在の北海道警察第三庁舎（元北海道工業試験所）が確認されます。この一帯は、昭和41年に羊ヶ丘へ移転するまで、研究施設や圃場として利用していた跡地でした。北海道農業試験場が琴似村で研究を行っていたことは、「農試公園」の名前で、今も札幌市民の記憶に残されています。*



北海道の厳しい気候に耐えられる作物の研究や、害虫を駆除する研究など、さまざまな実験研究が行われていました。*

北海道農業試験場で誕生した「キタアカリ」*



畑作研究センター（芽室町）

※…北海道農業研究センター提供

大きな期待が寄せられていました。以来約1世紀のあいだ、主食である米をはじめ小麦、大豆、そばなどの穀類、じゃがいも、てんさい、たまねぎなど、北海道を代表する数多くの農作物が送り出されてきました。じゃがいもを例にしますと、サラダに最適で調理しやすく改良された「さやか」や、低農薬栽培ができ、電子レンジでも簡単においしく調理できる「キタアカリ」など、嗜好、調理法の変化や健康に配慮した新しい品種もたくさん開発され、広く道民に愛用されています。また、病虫害や土壌改良、冷害への対策など、さまざまな分野での研究が進められ、北海道の農業生産高日本一を支えています。近年では、高度なバイオ技術を取り入れた研究も進められています。

北海道のもう一つの顔である酪農をはじめ

施設整備

北海道開発局営繕部では昭和26年の開局以来、北海道農業試験場の施設整備にたずさわってきました。特に昭和38年度から開始された羊ヶ丘への集中移転整備事業は、庁舎、温室や実験棟など合わせて70棟、延べ面積約21,100㎡の新築と、各種の圃場の整備や草地の造成など壮大な事業を行い、5ヶ年を要して完成しました。当時の月寒（羊ヶ丘）は交通の便も悪く、札幌市内の現場でしたが、監督員は泊まり込みで工事監理に当たりました。また、平成6年からは羊ヶ丘のてんさい研究期間や島松、遠軽など、道内に点在する畑作部門の芽室地区への集中移転整備が行われ、平成9年3月に完成しました。芽室の畑作研究センターは、日高山脈を望む雄大な田園風景になじむよう、三角屋根やレンガを用いた特徴のある施設となっています。

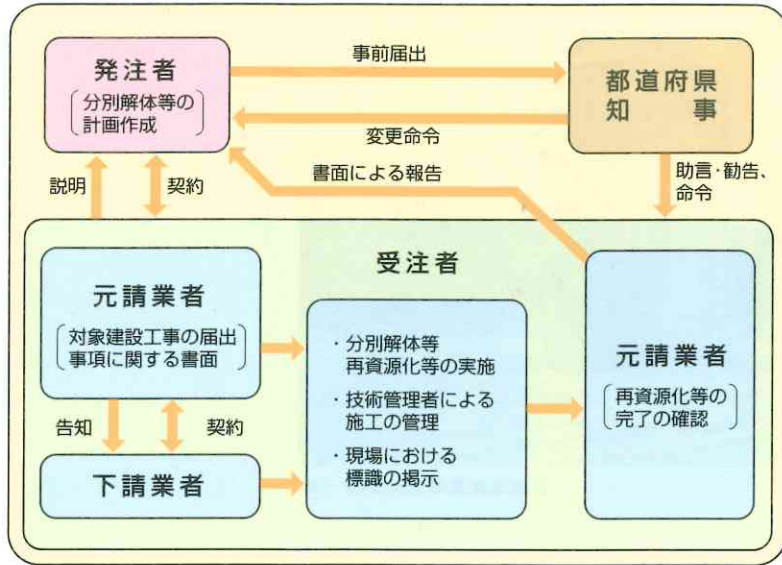
営繕部では試験研究機関の施設整備を、農業以外にも産業技術総合研究所、さけ・ます資源管理センターなどでも行っています。今後とも研究者が安全でより高度な研究に専念できる環境を施設づくりで支援し、道民の期待に応えるよう心がけていきます。

「建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律」のご案内

平成14年5月30日から分別解体等及び再資源化等が義務付けられます。

一定規模以上の工事（対象建設工事）については、特定建設資材廃棄物を基準に従って工事現場で分別（分別解体等）し、再資源化等することが義務付けられます。（義務付けは、特定建設資材を用いた建築物等の解体工事、特定建設資材を使用する新築工事等に限られます。）

○分別解体・再資源化の発注から実施への流れ



○一定規模以上の建設工事

工事の種類	規模の基準
建築物の解体	80m ²
建築物の新築・増築	500m ²
建築物の修繕・模様替 (リフォーム等)	1億円
その他の工作物に 関する工事(土木工事等)	500万円

○分別解体等及び再資源化等が必要となる特定建設資材は以下の通りです。

- ①コンクリート
- ②コンクリート及び鉄から成る建設資材
- ③木材
- ④アスファルト・コンクリート



学校教育の場で使える 「火山防災教育副読本」づくり

2000年有珠山噴火では、1人の犠牲者も出さない住民避難が成し遂げられました。これは、的確な火山噴火情報と自治体の判断、そして住民の意識の高さがあったからとされていますが、前回の1977年噴火では迅速な避難が出来なかったこの地域をここまで導いた岡田、宇井教授らの専門的な指導と地道なご努力、重要性の理解に立った自治体や学校教育による数々の取り組みには、賞賛が寄せられています。

室蘭開発建設部では、これらの貴重な体験を、次世代を担う子供たちに伝えるため、教育副読本としてまとめる取組を行っています。実際に学校の教育現場で使えるものとするため、編集委員には有珠山噴火の被害や、避難経験のある小中学校の教諭を関係自治体から推薦いただき、コーディネーターは、北海道大学宇井忠英教授にお願いしています。現在、内容についての検討を行っており、この副読本は平成14年度に完成する予定です。



北海道の地域開発を学んだ JICA研修員が市民と交流 ～公開成果発表会開催～

北海道開発局が受入れている国際協力事業団（JICA）の集団研修「地域開発計画セミナー」は、今年度で10年目を迎え、昨年10月から約2ヶ月にわたり、ポリヴィア、マレーシア、モザンビーク、パレスチナ、ルアンダ、トルコから7名の行政官が来道し、「北海道開発の経験」を通じて地域開発のノウハウを学びました。

12月8日、JICA札幌国際センターにて、昨年に続き2回目となる研修成果発表会が行われ、一般市民約50名がJICAの取組の紹介に続き、研修員それぞれの英語による発表を聞きました。その後行われたティーパーティーでは、研修員の母国の様子や発表の内容について、参加者がさかんに質問するなど、笑顔あふれる和やかな会となりました。研修員にとっては日本での良い思い出となったようです。



えでたぬき

春の陽気がぼかぼかと感じられるようになってきました。

弥生の月は、卒業・転勤・別れがつきものですが、また直ぐに、新しい仲間や環境でスタートを切る季節がやってきます。

先月は第19回冬季五輪ソルトレークシティ大会が行われ、3月にはプロ野球のオープン戦が本格化してきます。そして、5月31日からはいよいよ韓国ソウルでワールドカップサッカーがキックオフとなります。

試合内容も楽しみです。選手たちの目標や夢を追いかける姿を見ると、私も自分なりの努力目標を立てなければ...と、僅かな希望と勇気が湧いてきます。

新しい季節が感じられるこの時、今年も仕事に励み、親友を作り、好きなスポーツをし、昨年結婚をした妻の笑顔を見つめていられるようにするのが、私の新しいスタートであり目標かな。(は)

「しごと最前線」の、「地域用水」の絵が美しい。本当に町にこんな自然できれいな用水路が、その町その町にいろんな形であつたらおもしろいし、旅行者にもよろこばれそうです。

(大樹町 A. Iさん)

初めて読みました。「冬を豊かに快適に」はとても勉強になりました。冬の安全走行

(札幌市 M. Nさん)

に対しての実験、道路情報等これからの冬対策には欠かせないものですね。これだけの事業をするには、多くの方々の力があつてこそと思います。今計画している事業のイメージ図をどんどん載せてください。楽しみに待っています。

ひろば

は27号アンケートがきより...

「がいほつぐらふ」がインターネットでもご覧になれます。

北海道開発局のホームページでは、「ほっかいどうがいほつぐらふ」の誌面の一部を掲載しております。掲載している記事は、特集、しごと最前線、事業紹介(17号以降)です。バックナンバーも見ることができますので、ぜひアクセスしてみてください。

アドレス <http://www.hkd.mlit.go.jp>

北海道開発局は、携帯端末を利用した行政情報の提供を開始しました。

i モード版: <http://www.hkd.mlit.go.jp/i/>

J-s k y 版: <http://www.hkd.mlit.go.jp/j/>

開発カレンダー 2002年 4月～6月

()内は開催地

- 4月20日 国営滝野すずらん丘陵公園 春の開園
- 6月上旬 平成14年度 第1回環境セミナー (札幌第一合同庁舎2階講堂)
- 6月15日 平成14年度 石狩川水防公開演習 (夕張郡長沼町北長沼水郷公園地先)
- 6月28日 ザ・シンポジウムみなと in 釧路 (釧路市生涯学習センター)



平成13年度 オホーツク水防公開演習の様子



「北海道開発グラフ」はエコマーク認定の再生紙を使用しています。